

坂口安吾

教祖の文学



教祖の文学

— 小林秀雄論 —

去年、小林秀雄が水道橋のプラットホームから墜落して不思議な命を助かったという話をきいた。泥酔して一升ビンをぶらさげて酒ビンといっしょに墜落した由で、この話をきいた時は私の方が心細くなったものだ。それは私が小林という人物を煮ても焼いても食えないような骨っぽい、そしてチミツな人物と心得、あの男だけは自動車にハネ飛ばされたり川へ落っこったりするようなことがないだろうと思いきこんでいたからで、それはまた、

私という人間が自動車にハネ飛ばされたり川へ落っこつたりしすぎるからのアコガレ的な盲信でもあった。思えばしかしこう盲信したのは私のはなはだしい軽率で、私自身の過去の事実において、最もかく信ずべからざる根拠が与えられていたのである。

十六、七年前のこと、越後の親戚に仏事があり、私はモーニングを着て東京の家をでた。上野駅で偶然小林秀雄といっしょになったが、彼は新潟高校へ講演に行くところで、二人は上越線の食堂車にのりこみ、私の下車する越後川口という小駅まで酒をのみつづけた。私のよう

に胃の弱い者には食堂車ぐらい快適な酒はないので、常に身体がゆれているから消化して胃にもたれることがなく、気持よく酔うことができる。私も酔ったが、小林も酔った。小林は仏頂面ぶつちようづらに似合わず本心は心のやさしい親切な男だから、私が下車する駅へくると、ああ俺が持つてやるよと言って、私の荷物をぶらさげて先に立って歩いた。そこで私は小林がドッコイショと踏段へおいた荷物を、ヤ、ありがとう、とぶらさげて下りて別れたのである。山間の小駅はさすがに人間の乗ったり降りたりしないところだと思って私は感心したが、第一、駅員も

いやしない。人ツ子一人いない。これはまた徹底的にカ
ンサンな駅があるもので、人間が乗ったり降りたりしな
いものだから、ホームの幅が何尺もありやしない。背中
にすぐ貨物列車がある。そのうちに小林の乗った汽車が
通りすぎてしまうと、汽車のなくなった向こう側に、私
よりも一段高いホンモノのプラットホームが現われた。
人間だってたくさんウロウロしていらあ。あときは呆
れた。私がプラットホームの反対側へ降りたわけではな
いので、小林秀雄が私を下ろしたのである。

だから私はもう十六、七年前のあるときから、小林秀

雄が水道橋から墜落しかねない人物だということ信じてもよい根拠が与えられていたのであったが、私は全然あべこべなことを思いこんでいたのは、私がはなはだ軽率な読書家で、小林の文章にだまされて心眼を狂わせていたからにほかならない。

思うに小林の文章は心眼を狂わせるに妙を得た文章だ。私は小林と碁を打ったことがあるが、彼は五目置いて（ほんとはもつと置く必要があるのだが、五ツ以上は恰好が悪いやと言つて置かないのである）けっして喧嘩ということをやらぬ。置き碁の定石のお手本どおりのや

りかたで、地どり専門、横槍よこやりを通すような打ち方はまったくやらぬ。こっちの方がムリヤリいじめに行くのが気の毒なほど公式的そのものの碁を打つ。碁というものは文章以上に性格をいつわることができないもので、文学の小林は独断先生のごとくだけでも、ほんとうは公式的な正統派なんだと私はその時から思っていた。しかし彼の文章の字面じづらからくる迫真力というものは、やっぱり私の心眼を狂わせる力があって、それは要するに、彼の文章を彼自身がそう思いこんでいるということ。そして当人が思いこむということがその文学をして実在せしめ

る根柢的な力だということ。それを彼が信条とし、信条どおりに会得したせいではないかと私は思う。

彼の昔の評論、志賀直哉論をはじめ他の作家論など、今読み返してみると、ずいぶんいい加減だと思われるものが多い。しかし、あのころはあれで役割を果していた。彼が幼稚であったよりも、我々が、日本が、幼稚であったので、日本は小林の方法を学んで小林といっしょに育つて、近ごろではあべこべに先生の欠点がつくようになったけれども、実は小林の欠点がわかるようになったのも小林の方法を学んだせいだということ。彼の果

たした文学上の偉大な役割を忘れてはならない。

「それは少しも遠い時代ではない。何故なら僕は殆どそれを信じてゐるから。そして又、僕は、無理な諸観念の跳ちようりよう梁りやうしないさういふ時代に、世ぜ阿あ弥みが美といふものをどういふ風に考へたかを思ひ、其処に何の疑はしいものがない事を確めた。『物数を極めて、工夫を尽した後、花の失せぬところを知るべし』美しい『花』がある。『花』の美しさといふ様なものはない。彼の『花』の観念の曖昧あいまいさに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされてゐるに過ぎない」(当麻)

彼が世阿弥の方法だと言っているところがそっくり彼の方法なのであり、彼が世阿弥について思いこんでいる態度が、つまり彼が自分の文学について読者に要求している態度でもある。

僕がそれを信じているから、とくる。世阿弥の美についての考えに疑わしいものがないから、観念の曖昧自体が実在なんだ、という。美しい「花」がある。「花」の美しさというものはない。

私はしかしこういう気の利いたような言い方は好きでない。ほんとうは言葉の遊びじゃないか。私は中学生の

とき漢文の試験に「日本に多きは人なり。日本に少きも亦人なり」という文章の解釈をだされて癩しやくにさわったことがあつたが、こんな気のきいたような軽口みたいなことを言つてムダな苦勞をさせなくつても、日本に人は多いが、ほんとうの人物は少ない、とハッキリ言えばいいじゃないか。こういう風に明確に表現する態度を尊重すべきであつて日本に人は多いが人は少ない、なんて、駄洒落だじゃれにすぎない表現法は抹殺まっさつするように心掛けることがたいせつだ。

美しい「花」がある。「花」の美しさというものはな

い、という表現は、人は多いが人は少ないとは違って、これはこれで意味に即してもいるのだけれども、しかし小林に曖昧さをもてあそぶ性癖があり、気のきいた表現にみずから思いこんで取り澄している態度が根柢にある。彼が世阿弥について、いみじくも、美についての觀念の曖昧さも世阿弥には疑わしいものがないのだから、と言っているのが、つまり全く彼の文学上の觀念の曖昧さを彼自身それについて疑わしいものがないということしやはんで支えてきた這般しやはんの奥義を物語っている。全くこれは小林流の奥義なのである。

あげくの果てに、小林はちかごろ奥義をきわめてしまったから、人生よりも一行のお筆先の方が真実なるものとなり、つまり武芸者も奥義に達してしまおうともう剣などは握らなくなり、道のまんなかに荒れ馬がつながれていると別の道を廻って君子危きに近よらず、これが武芸の奥義だという、悟道に達して、何々教の教祖のごときものとなる。小林秀雄も教祖になった。

しかし剣術は本来ブンナグル練磨であり、相手にブンナグラレル先に相手をブンナグル術で、悟りをひらく道具ではなかった。けれども小林秀雄のところへ剣術を習

いに行くくと、剣術など勉強せず、危きに近よらぬくふうをしろ、それが剣術だと教えてくれる。これが小林流という文学だ。

「生きてゐる人間なんて仕方のない代物だな。何を考へてゐるのやら、何を言ひだすのやら、仕出かすのやら、自分の事にせよ、他人事にせよ、解つた例ためしがあつたのか。鑑賞にも観察にも堪へない。其処に行くくと死んでしまつた人間といふものは大したものだ。何故あゝはつきりとしつかりとしてくるんだらう。まさに人間の形をしてゐるよ。してみると、生きてゐる人間とは、人間にな

りつゝある一種の動物かな」(無常といふこと)とくる。

だから、歴史には死人だけしか現われてこない。だから退^のツ引き^びならぬ人間の相しか現われぬし、動じない美しい形しか現われぬし、とおっしゃる。生きている人間を観察したり仮面をはいだり、罰が当るばかりだとおっしゃるのである。だから小林のところへ文学を習いに行くと人生だの文学などは雲隠れして、彼はすでに奥義をきわめ、やんごとない教祖であり、悟道のこもった深遠な一句を与えてくれるというわけだ。

生きている人間などは何をやりだすやら解ったためし

がなく鑑賞にも観察にも堪えないという小林は、だから死人の国、歴史というものを信用し、「歴史の必然」などということをおっしゃる。「歴史の必然」か。なるほど、歴史は必然であるか。

西行がなぜ出家したか、などいうことをいくら突きとめようたって、謎なぞは謎、そんなところから何も出てきやしない、実朝さねともがなぜ船をつくったか、そんなことはどうでもいい、右大臣であつたことも、将軍であつたことも、問題ではない、ただ詩人だけを見ればいいのだとおっしゃる。

だから坂口安吾という三文文士が女に惚れたり飲んだくれたり時には坊主になろうとしたり五年間思いつめて接吻したら慌あわててしまつて絶交状をしたためて失恋したり、近ごろはまたデカダンなどとますますもつて何をやらかすかわかりやしない。もとより鑑賞に堪えん。第一奴めが何をやりおつたにしたところで、そんなことは奴めの何物でもない。こうおっしやるにきまつている。奴めが何物であるか、それは奴めの三文小説を読めばわかる。教祖にかかつては三文文士の実相のごとき手玉にとつてチヨイと投げすてられ、惨また惨たるものだ。

ところが三文文士の方では、女に惚れたり飲んだくれたり、もっぱらその方に心掛けがこもっていて、死後の名声のごとき、てんで問題にしていなない。教祖の師匠筋に当たっている、アンリベイル先生の余の文学は五十年後に理解せられるであろう、とんでもない、私は死後に愛読されたってそれは実にただタヨリない話にすぎないですよ、死ねば私は終わる。私とともにわが文学も終わる。なぜなら私が終わるのですから。私はそれだけなんだ。

生きてる奴は何をやりだすかわからんとおっしやる。

まつたくわからないのだ。現在こうだから次にはこうやるだろうという必然の筋道は生きた人間にはない。死んだ人間だって生きてる時はそうだったのだ。人間に必然がないごとく、歴史の必然などというものは、どこにもない。人間と歴史は同じものだ。ただ歴史はすでに終わっており、歴史の中の人間はもはや何事を行なうこともできないだけで、しかし彼らがあらゆる可能性と偶然の中を縫っていたのは、彼らが人間であつたかぎり、まちがいはない。

歴史には死人だけしか現われてこない、だから退ツ引

きならぬギリギリの人間の相を示し、不動の美しさをあらわす、などとは大嘘だ。死人の行跡が退ツ引きならぬギリギリなら、生きた人間のしでかすことも退ツ引きならぬギリギリなのだ。もしまた生きた人間のしでかすことが退ツ引きならぬギリギリでなければ、死人の足跡も退ツ引きならぬギリギリではなかったまでのこと、生死二者変わりのあるはずはない。

つまり教祖は独創家、作家ではないのである。教祖は本質的に鑑定人だ。教祖がちかごろ骨董を愛すというのは無理がないので、すでに私がその碁において看破し

たごとく彼は天性の公式主義者であり、定石主義者であり、保守家であり、常識家であつて、死人はともかく死んでおり、もう足をすべらして墜落することがないから安心だが、生きた奴とくると、何をしでかすかわからず、教祖のごとく何をしでかす魂胆がなくとも、足をすべらして、プラットホームから落っこちる、どこに伏兵がひそんでいるかわからない。実にどうも生きるということはやっカイだ。

だから教祖の流儀には型、つまり公式とか約束というものが必要で、死んだ奴とか歴史はもう足をすべらすこ

とがないので型の中で料理ができるけれども、生きてる奴はいつ約束を破るか見当がつかないので、こういう奴は鑑賞に堪えん。歴史の必然などという妖怪じみた調味料をあみだして、料理の腕をふるう。生きてる奴の料理はいやだ、あんなものは煮ても焼いてもダメ、鑑賞に堪えん。調味料がきかない。

あまり自分勝手だよ、教祖の料理は。おまけにケツタイで、類のないような味だけれども、しかし料理の根本は保守的であり、型、公式、常識そのものなのだ。生きてる人間というものは、（実は死んだ人間でも、

だから、つまり）人間というものは、自分でも何をしでかすかわからない、自分とは何物だか、それもてんで知りやしない、人間はせつないものだ、しかし、ともかく生きようとする、何とか手探りででも何かましな物を探し^{すが}継りついて生きようという、せっぱつまれば全く何をやらかすか、自分ながらたよりない。疑ぐりもする、信じもする、信じようとし思いこもうとし、体当たり、遁走、まったく悪戦苦闘である。こんなにして、なぜ生きるんだ。文学とか哲学とか宗教とか、もろもろの思想と
いうものがそこから生れて育ってきたのだ。それはすべ

て生きるためのものなのだ。生きることにはあらゆる矛盾があり、不可決、不可解、てんで先が知れないからの悪戦苦闘の武器だかオモチヤだか、ともかくそこでフリ廻さずにいられなくなつた棒キレみたいなものの一つが文学だ。

人間は何をやりだすかわからんから、文学があるのじやないか。歴史の必然などという、人間の必然、そんなもので割り切れたり、鑑賞に堪えたりできるものなら、文学などの必要はないのだ。

だから小林はその魂の根本において、文学とは完全に

縁が切れている。そのくせ文学の奥義をあみだし、一宗の教祖となる、これ実に邪教である。

西行も実朝も地獄を見た。陰惨な罪業深い地獄、物悲しい優しい美しい美しい地獄。そして西行の一生は「いかにすべき我心」また、孤独という得体の知れぬものについての言葉なき苦吟をやめたことがなかったし、実朝は殺されたがしかし実朝の心はこれを自殺と見たかもしれぬ、と言う。まさしく、そのとおりだ。邪教もまた、真理を説くか。じこうさま 璽光様が天照大神あまてらすおおみかみの生まれ変わりのごとくに。

「西行はなぜ出家したか、その原因に就て西行研究家は

多忙なのであるが、僕には興味がないことだ。凡そ詩人を解するには、その努めて現はさうとしたところを極めるがよろしく、努めて忘れようとして隠さうとしたところを詮索したとて、何が得られるものでもない」（西行）

そして近代文学という奴は仮面を脱げ、素面を見せよ、そんなことばかり喚わめいて駈けだして、女々めめしい毒念が方凶もなくひろがって、罰が当たってしまったんだ、とおっしゃる。

しかり、詩人を解すには、詩を読むだけでたくさんだ。こんなこともした、こんな一面もあった、と詮索して同

類発見を喜んだところで詩人を解したわけでもなく、まさしく詩を読むことだけが詩人を解す方法なのだ。小林は詩を解す、という。しかり、鑑賞はそれだけでよい。鑑賞家というものは。

しかし、ここに作家というものがある。彼の読書は学ぶのだ。学ぶとは争うことだ。そして、作家にとっては、作品は書くのみのものではなく、作品とはまた、生きることだ。小林が西行や実朝の詩を読んでいるのも彼らの生きた翳^{かげ}であり、彼らが生きることによって見つめねばならなかった地獄を、小林もまた読みとることによって

感動しているのだ。

仮面を脱げ、素面を見せよ、ということとはそれを作品の上において行なったから罰が当たっただけで、小説という作品の場合においては、作家は思想家であると同時に戯作者でなければならぬ。仮面を脱いで素面を見せることは小説ではない。これを小説だと思えば罰が当たるのは是非もない。しかし作家の私生活において、作家は仮面をぬぎ、とことんまで裸の自分を見つめる生活を知らなければ、その作家の思想や戯作性などタカが知れたもので、鑑賞に堪えうる代物ではないにきまっている。

小説は（芸術は）自我の発見だという。自我の創造だ
という。作家が自分というものを知ってしまえば、作品
はそれによつて限定され、定められた通路しか通れなく
なる。しかしほんとうの小説というものは、それを書き
終わるときに常に一つの自我を創造し、自我を発見すべ
きものだ、と、これは文学技師アンドレ・ジツド氏の御
意見だ。ちなみにジツド氏は文学に通曉し、あらゆる技
法を心得、縦横に知識を用い、術をつくし、ある時は型
を破つて、小説をつくる技師であるが、ほんとうの小説
家だとは私は思っていない。ジツド氏が自身の小説にお

いて、自我を創造、発見したか、私は疑問に思っている。

わが教祖、小林氏も芸術は自我の創造発見だと言うのである。紙に向かった時には何も無い。書くことによつて、創造され、見出されて行くものだ、と言うのだ。私も大いに賛成である。

しかし、紙に向かつて何も無いということとは自分について何も知らないということではない。ある限度までは知っている。自分というものをある限度まで知悉ちしつしない人間が、小説を書けるはずのものではない。一応自分というもの、また、人間というものに通じていなくて、小

説の書けるわけはないのだ。なお、そのうえに発見する
のであり、創造するのだ。なぜなら、作家というものは、
今ある限度、限定に対して堪え得ないということが、作
家活動の原動力でもあるからだ。

モオツアルトの作品はほとんどすべて世間の愚劣な偶
然なあるいは不正な要求に応じてあわただしい心労のう
ちになったもので、あらかじめ目的を定め計画を案じて
作品に熟慮専念するような時間はなかったが、モオツア
ルトは不平もこぼさず、不正な要求に応じて大芸術を残
した。天才は外的偶然を内的必然と観ずる能力がそなわ

っているものだ、と言う。それはモオツアルトには限らない。チエホフの戯曲も不正な要求に応じて数日にして作られ、近松の戯曲もそうだ。ドストエフスキーも借金に追われて馬車馬のごとく書きまくり、読者の嗜好しこうに応じてスタヴロオギンの歩き道まで変えて行くという己れを捨てた凝り方だ。いかにも外的偶然を内的必然と化する能力が天才の作品を生かすものだ。

しかしながら、作品について目的を定め計画を案じ熟慮専念する時間がなくとも、少なくとも小説作者の場合においては、一応人間に通じていることは絶対の条件で

あり、人間通の裏づけは自我の省察で保たれるもの、そして常に一つの作品を書き終わったところから、新たに出発するものだ。一つの作品は発見創造と同時に限界をもたらずから、作家はそこにふみとどまってはいられず、不満と自己叛逆を起こす。ふみとどまった時には作家活動は終わりであり、制作の途中においても作家をして没頭せしめる力は限界をふみこし発見にみずから驚くことの新鮮なたのしきによる。

生きた人間を自分の文学から締め出してしまった小林は、文学とは絶縁し、文学から失脚したもので、一つの

文学的出家遁世だ。私が彼を教祖というのは思いつきの言葉ではない。

彼はもう文学を鑑賞し詩人を解するだけだ。歴史の必然とか人間の必然という自分勝手な角度によって。彼はもう文学や詩人と争い、格闘することがないのである。争うとか格闘するということは、自分を偶然の方へ賭けることだから、彼はもう偶然などは俺にはいらぬという悟りをひらいているのだ。詩人のつとめて隠そうとし忘れようとしたものを暴くあばのは鑑賞のためや詩人を解するためではなく、自分の仮面をはがそうとする同じ働き

が他へ向けられただけのこと、普遍的な真理というよ
うなものを暴くんじやない。仮面を脱ぐということも真
理を暴くというのじやなくて、ただそうせずにいられぬ
からだというような罰の当たった苦惱格闘、そんなもの
はもう小林には用はない。

常に物が見えている。人間が見えている。見えすぎて
いる。どんな思想も意見も彼を動かすに足りぬ。そして、
見て、書いたただけだ。それが徒然草つれづれぐさという空前絶後の批
評家の作品なのだと小林は言う。これはつまり小林流の
奥義でもあり、批評とは見える眼だ、そして小林には人

間が見えすぎており、どんな思想も意見も、見える目をくもらせず彼を動かすことはできない。彼は見えすぎる目で見て、鑑定したままを書くだけだ。

私はしかし小林の鑑定書など全然信用してやしないのだ。西行や実朝の歌や徒然草が何物なのか。三流品だ。私はちつともおもしろくない。私も一つ見本をだそう。これはただ素朴きわまる詩にすぎないが、私はしかし西行や実朝の歌、徒然草よりもはるかに好きだ。宮沢賢治の「眼にて言う」という遺稿だ。

だめでせう

とまりませんな

がぶがぶ湧いてゐるですからな

ゆふべからねむらず

血も出つゞけなもんですから

そこらは青くしんしんとして

どうも間もなく死にさうです

けれどもなんといい風でせう

もう清明が近いので

もみぢの嫩芽わかめと毛のやうな花に

秋草のやうな波を立て

あんなに青空から

もりあがつて湧くやうに

きれいな風がくるですな

あなたは医学会のお帰りか何かは判りませんが
黒いフロックコートを召して

こんなに本気にいろいろ手あてもしていたゞけば
これで死んでもまづは文句もありません
血がでてゐるにかゝはらず

こんなのにのんきで苦しくないのは

魂魄こんぱくなかばからだをはなれたのですかな

たゞどうも血のために

それを言へないのがひどいです

あなたの方から見たら

ずるぶんさんたんたるけしきでせうが

わたくしから見えるのは

やつぱりきれいな青ぞらと

すきとおつた風ばかりです

半分死にかけてこんな詩を書くなんて罰当たりの話だけれども、徒然草の作者が見えすぎる不動の目で見えて書いたという物の実相と、この罰当たりが血をふきあげながら見た青空と風と、まるで品物が違うのだ。

思想や意見によって動かされるといふことのない見えすぎる目。そんな目は節穴ふしあなみたいなもので物の死相しか見ていやしない。つまり小林の必然という化け物だけしか見えやしない。平家物語の作者が見たという月、ボンクラの目に見えやしないと小林がいうそんな月が一体そ

んなステキな月か。平家物語なんてものが第一級の文章だなんて、バカも休み休み言いたまえ。あんなものに心の動かぬ我々が罰が当たっているのだとは阿呆らしい。

ほんとうに人の心を動かすものは、毒に当てられた奴、罰の当たった奴でなければ、書けないものだ。思想や意見によって動かされるといふことのない見えすぎる目などには、宮沢賢治の見た青ぞらやすきとおった風などは、見ることができないのである。

生きている奴は何をしでかすか分らない。何もわからず、何も見えない、手探りでうろつき廻り、悲願をこめ

ギリギリのところを這^はいまわっている罰当たりには、物の必然などはいっこうに見えないけれども、自分だけのものが見える。自分だけのものが見えるから、それがまた万人のものとなる。芸術とはそういうものだ。歴史の必然だの人間の必然などが教えてくれるものではなく、偶然なるものに自分を賭けて手探りにうろつき廻る罰当たりだけが、その賭によって見ることのできた自分だけの世界だ。創造発見とはそういうもので、思想によって動揺しない見えすぎる目などに映る陳腐なものではないのである。

美しい「花」がある、「花」の美しさというものはない、などというモヤモヤしたものではない。死んだ人間が、そして歴史だけが退ツ引きならぬぎりぎりの人間の姿を示すなどとは大嘘の骨張で、何をしでかすかわからない人間が、全心的に格闘し、踏み切る時に退ツ引きならぬぎりぎりの相を示す。それが作品活動として行われる時には芸術となるだけのことであり、よく物の見える目は鑑定家の目にすぎないものだ。

文学は生きることだよ。見ることではないのだ。生きるということとは必ずしも行なうということでもよ

いかもしれぬ。書齋の中に閉じこもっていてもよい。しかし作家はともかく生きる人間の退ツ引きならぬギリギリの相を見つめ自分の仮面を一枚ずつはぎとって行く苦痛に身をひそめてそこから人間の詩を歌いだすのでなければダメだ。生きる人間を締めだした文学などがあるものではない。

小説は十九世紀で終わったという、ここにおいて教祖はまさしく邪教であり、お筆先きだ。時代は変わる、無限に変わる。日本の今日のごときはカイビヤク以来の大変わりだ。別に大変わりをしなくとも、時代は常に変わ

るもので、あらゆる時代に、その時代にだけしか生きられない人間というものがおり、そして人間というものは小林のごとくに奥義に達して悟りをひらいてはおらぬもので、専一に生きることには浮身をやつしているものだ。

そして生きる人間はおのずから小説を生み、また、読むはずで、言論の自由があるかぎり、万古末代終わりはない。小説は十九世紀で終わりになつたゾヨ、これは璽光様の文学的ゴセクタクというものだ。

人生とはめいめいがめいめいの手でつくるものだ。人間はこういうものだと言つて、奥義にとじこもり悟りを

ひらくのは無難だが、そうはできない人間がある。「万事たのむべからず」こう見込んで出家遁世、よく見える目で徒然草を書くというのは落第生のやることで、人間は必ず死ぬ、どうせ死ぬものなら早く死んでしまえというようなことは成り立たない。恋は必ず破れる、女心男心は秋の空、必ず仇心が湧き起こり、去年の恋は今年は色がさめるものだとわかっている、だから恋をするなとは言えないものだ。それをしなければ生きていく意味がないようなもので、生きるということは全くバカげたことだけれども、ともかく力いっぱい生きてみるより仕

方がない。

人生はつくるものだ。必然の姿などというものはない。歴史というお手本などは生きるためにはオソマツなお手本にすぎないもので、自分の心にきいてみるのが何よりのお手本なのである。仮面をぬぐ、裸の自分を見さだめ、そしてそこから踏み切る、型も先例も約束もありはせぬ、自分だけの独自の道を歩くのだ。自分の一生をこしらえて行くのだ。

小林にはもう人生をこしらえる情熱などというものはない。万事たのむべからず、そこで彼はよく見える目で

物を人間をながめ、もっぱら死相を見つめてそこから必然というものを探す。彼は骨董の鑑定人だ。

花鳥風月を友とし、骨董をなでまわして充ち足りる人には、人間の業ごうと争う文学は無縁のものだ。小林は人間孤独の相と言ひ、地獄を見る、と言う。

あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世も

かくや苦しかるべき (西行)

花みればそのいはれとはなけれども心のうちぞ

苦しかりける (西行)

風になびく富士の煙の空にきえて行方も知らぬ

我が思ひかな (西行)

ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄行方もなしと

いふもはかなし (実朝)

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蝉鳴きて

秋は来にけり (実朝)

秀歌である。たしかに人間孤独の相を見つめつつけて
 生きた人の作品に相違なく、また、純潔な魂の見た風景

であつたに相違ない。

しかし孤独を観ずるなどということが、いつたい人生にとつて何物であるのか。

芸術は長し、人生は短しと云う。なるほど人間は死ぬ。

しかし作品は残る。この時間の長短はしかし人生と芸術との価値をはかる物差しとはならないものだ。作家にとつて大切なのは言うまでもなく自分の一生であり人生であつて、作品ではなかつた。芸術などは作家の人生においてにはたかが商品にすぎず、または遊びにすぎないもので、そこに作者の多くの時間がかけられ、心労苦吟が賭

けられ、時には作者の肉をけずり命を奪うものであつても、作者がそこに没入し得る力となつてゐるものはそれが作者の人生のオモチヤであり、他の何物よりも心を充たす遊びであつたというほかに何物があるのか。そしてまた、それは「不正なる」取引によりただ金を得るための具でもあり、女に惚れたり浮気をしたりするためのモトデを稼ぐ商品であつた。

余の作品は五十年後に理解せられるであろう。私はそんな言葉を全然信用していやしない。カリにアンリベイ
ル先生はたしかにそう思いこんでいたにしたところで、

芸術は長し人生は短し、そんなマジナイみたいな文句を
鵜^う呑^のみにし真^まにうけているだけで、実生活では全然それ
を信じていないのが人の心というものである。死んでし
まえば人生は終わりなのだ。自分が死んでも自分の子供
は生きているし、いつの時代にも常に人間は生きている。
しかしそんな人間と、自分という人間は別なものだ。自
分という人間は、全くたった一人しかいない。そして死
んでしまえばなくなってしまう。はっきり、それだけの
人間なんだ。

だから芸術は長しだなんて、自分の人生よりも長いも

のだって、自分の人生から先の時間はこれはハッキリも
う自分とは無縁だ。ほかの人間も無縁だ。

だから自分というものは、常にたった一つ別な人間で、
めいめいの人がそうであり、歴史の必然だの人間の必然
だのそんな変テコな物差しではかったり料理のできる人
間ではない。人間一般は永遠に存し、そこに永遠という
観念はありうるけれども、自分という人間には永遠なん
て観念はミジンといえどもあり得ない。だから自分とい
う人間は孤独きわまる悲しい生物であり、はかない生物
であり、死んでしまえば、なくなる。自分という人間に

とっては、生きること、人生が全部で、彼の作品、芸術のごときは、ただ手沢品中の最も彼の愛した遺品というほかの何物でもない。

人間孤独の相などは、きまりきったこと、当たりまえすぎることに、そんなものは屁へでもない。そんなものこそ特別意識する必要はない。そうにきまりきっているのだから。仮面をぬぎ裸になった近代が毒に当てられて罰が当たっているのではなく、人間孤独の相などというものをほじくりだして深刻めかしている小林秀雄の方が毒にあてられ罰が当たっているのだ。

自分という人間は他にかげがえのない人間であり、死ねばなくなる人間なのだから、自分の人生を精いっぱい、よりよく、くふうをこらして生きなければならぬ。人間一般、永遠なる人間、そんなものの肖像によって間に合わせたり、まぎらしたりはできないもので、単純明快、よりよく生きるほかに、何物もありやしない。

文学も思想も宗教も文化一般、根はそれだけのものがあり、人生の主題眼目は常にただ自分が生きるということだけだ。

よく見える目、そしてよく人間が見え、見えすぎたと

いう兼好法師はどんな人間を見たというのだ。自分という人間が見えなければ、人間がどんなに見えすぎたって何も見ていやしないのだ。自分の人生への理想と悲願と努力というものが見えなければ。

人間は悲しいものだ。切ないものだ。苦しいものだ。不幸なものだ。なぜなら、死んでなくなってしまうのだから。自分一人だけがそうなんだから。めいめいがそういう自分を背負っているのだから、これはもう、人間同志の關係に幸福などありやしない。それでも、とにかく、生きるほかに手はない。生きる以上は、悪くより、よく

生きなければならぬ。

小説なんて、たかが商品であるし、オモチャでもあるし、そして、また、夢を書くことなんだ。第二の人生と
いうようなものだ。あるものを書くのじゃなくて、ない
もの、今ある限界を踏みこし、小説はいつも背のびをし、
駈けだし、そして跳びあがる。だから墜落もするし、尻
もちもつくのだ。

美というものは物に即したものの、物そのものであり、
生きぬく人間の生きゆく先々に支えとなるもので、よく
見える目というものによって見えるものではない。美は

悲しいものだ。孤独なものだ。不幸なものだ。人間がそういうものなのだから。

小林はもう悲しい人間でも不幸な人間でもない。彼が見ているのは、たかが人間の孤独の相にすぎないので、生きる人間の苦悩というものは、もう無縁だ。そして満足している。骨董を愛しながら。鑑定しながら。そして奥義をひらいて達観し、よく見えすぎる目で人間どもを眺めている。思想にも意見にも動きやしない。だからもう生きていく人間どものように、何かわけのわからぬことをしでかすようなことはないのだ。そのくせ彼は水道

橋のプラットホームから落っこつたが、彼の見えすぎる目、孤独な魂は何と見たか。なにつまらねえ、たとえ死んだって、オレ自身の心は自殺と見たっていいじゃないか。なんでもねえや。

自殺なんて、なんだろう。そんなものこそ、理窟も何もいりやしない。風みたいな無意味なものだ。

女のふくらはぎを見て雲の上から落っこつたという久米の仙人の墜落ぶりにくらべて、小林の墜落は何という相違だろう。これはただもう物体の落下にすぎん。

小林秀雄という落下する物体は、その孤独という詩魂

によつて、落下を自殺と見、虚無という詩を歌いだすことが出来るかも知れぬ。

しかしまことの文学というものは久米の仙人の側からでなければ作ることのできないものだ。ほんとうの美、ほんとうに悲壮なる美は、久米の仙人が見たのである。いや、久米の仙人の墜落自体が美というものではないか。落下する小林は地獄を見たかも知れぬ。しかし落下する久米の仙人はただ花を見ただけだ。その花はそのまま地獄の火かもしれぬ。そして小林の見た地獄は紙に書か

れた餅もちのような地獄であつた。彼はもう何をしでかすかわからない人間という奴ではなくて教祖なのだから。人間だけが地獄を見る。しかし地獄なんか見やしない。花を見るだけだ。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館